
乱反射する少年

夢来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乱反射する少年

【Nコード】

N5286BA

【作者名】

夢来

【あらすじ】

ある日私は、鏡の中に『少年』が『見える』ようになった。気味の悪い少年は、いつでも薄笑いを浮かべて私を見てる……。

数年前、私は事故で両親を亡くした。その時の私はまだ高校を卒業したばかりで、成人もしていなかった。

両親が死ぬ瞬間を、私は目の前で見てた。今でも鮮明に思い出せる。

あれは、近くのスーパーへ買い物に行った帰り道だった。お父さんとお母さんは、道横断歩道を渡ろうとしてたんだ。

信号機のランプが赤から青に変わって、二人はアスファルトの上のゼブラを踏み出した。そして真ん中あたりで歩みを止めて、こちらを振り返ったんだ。

横断歩道を渡る手前で、私がほどけた靴紐を結び直してたから。

今思えば、お父さんもお母さんもそこで立ち止まらなければよかったの。私が靴紐なんて気にしなければ、よかったの……。

「早く」って声が聞こえて、顔を上げて立ち上がった時、物凄い勢いで私の鼻先をつむじ風が掠めた。

何だか鈍い音がして、すぐに甲高いスリッパ音が聞こえた。行き交う人々のがやがやとした喧騒が一瞬だけ止んで、「きゃあああああ！」って叫んだ誰かの悲鳴で、再び始まった狂騒はよりいっそう騒がしくなった。

そんな中、信号機のスピーカーから流れる『とおりゃんせ』の曲だけが、私の耳には酷くやかましく響いてた。

いつの間にか足元に転がっていた大型トラックの鏡片。その中で、『誰か』が笑ってた。

その日からだ。私は鏡の中に『少年』を見るようになった。何かの比喻とかじゃないよ。

お父さんとお母さんの事故の翌日、朝起きたら鏡の中にいるはず

のない少年の姿が見えたの。私のすぐ左隣に、前髪がうんと長い男の子が立っていた。

びっくりしたよ。もしかしたら叫んでたかもしれない。

私の肘の辺りの背丈でね、歳は七つか八つくらいに見えた。

口元をにやりと歪ませて、鏡越しに私を見詰めてたんだ。

ぎぎぎ……って効果音が付きそうな感じで首を左に回したけど、

実際私の隣には壁しかなかった。

すごく怖くてね、数日は布団を被って過ごした。なるべく鏡も見ないようにしてね。だって、前日にトラックの鏡片の中にいた『誰か』と、その少年は一緒だったんだもん。

そうじゃなくても、突然そんな見えるようになったら誰だって怖いよ、きつと。

布団に潜りながら、病院に行こうかとも考えたけど、結局行かなかった。鎮静剤とか射たれて薬いっぱい出されても困るし。

どこか頭は冷静で、その少年が幻覚とかじゃなくて幽霊の類いだっというのが分かってたつても、理由の一つかもしれない。……まあ、幻覚を見る人はみんなそう思うんだらうけど。

それから数日後、私は普通に仕事に行けるようになった。

ちよつと慣れたんだよね、少年が見えることに。気味は悪いけど、見えるだけで彼は何もしてこないし、「だったらいつまでも寝てられない」って、吹っ切れた節もある。

彼はどこにいても見えたけど、（例えば化粧用のコンパクトミラーの中とか、会社のトイレの鏡とか）とにかく、両親が死んで私は『鏡の中にいる少年』が見えるようになったただけの話。

死を目の当たりにして霊感が目覚めたって言うのかな。

そう思ってた。半年前の……ううん、数分前までの私は。

ざわざわと、人々がさざめき合っている。

トラックに女性が一人撥ね飛ばされたから。歩行者用の信号は堂々と赤なのに、その女性は踊るように飛び出して行ったから。

他人事みたいに言ってるけど、飛び出したのはもちろん私。

もう自分が痛いのか何なのかさえも分かんないけど、眼前に広がる血の海を見れば、救急車到着前に私の命は事切れるんじゃないかって思う。

自殺なんかじゃないよ。押されたの。人に、背中を。

揺れる視界の中、顔のすぐ横に転がる鏡片に、あの少年が写ってた。いつもの薄気味悪い笑顔で、私を見下ろしていた。

ぼんやりと霞む意識の中、それでもどこか頭は冷静で、彼は『鏡の中にいる』んじゃないくて、『鏡を通してしか見る事ができない』んだなって、理解した。

彼は、いつでも『いた』んだ。私のすぐ隣に。

刹那、背中に氷水を流されたみたいにぞっとしたけど、すぐに視界は暗転した……………。

（後書き）

『見えている』だけだと思っていたものが、実はそこに『いた』という事実を理解した瞬間ってすごく怖いんじゃないかと思います。

例えば、冷蔵庫の裏からカサカサと音だけが聞こえる。それは『聞こえている』だけ。しかしその隙間から黒光りするアイツが長い触覚を現したりしたら……それは『いる』という事実。

……いや、この例えはちょっと違う。だが怖い。怖いよ。

この話は全てフィクションですが、もしかしたらあなたの家にも
以上後書き、夢来でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5286ba/>

乱反射する少年

2012年1月14日17時47分発行